

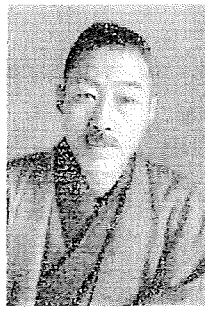
「野趣豊か」吉祥寺生活

文人の

武蔵野

金子光晴（1895～1975年）には「武蔵野」という題の詩とエッセーがありま
すが、いずれも作中に吉祥寺
という地名への言及があるわ
けではありません。「武蔵野」
がそのまま吉祥寺を指すわけ
でもありません。
しかし、金子と森三千代（1
901～77年）の二子である

金子光晴 ⑦



詩人の野口雨情（国立国会図書館近代日本人の肖像）から。金子が吉祥寺に住むきっかけを作った

森乾（1925～2000年）に「金子光晴と武蔵野」という小文があり、そこには親子3人が吉祥寺に暮らすようになったきっかけが記されています。

乾によると、1934年（昭

和9年）、詩人仲間の野口雨情（1882～1945年）が金子に吉祥寺を紹介したことに始まるそうです。売り地があるから見に行かないかと野口に誘われた金子は、親子3人で井の頭公園を散策した後、成蹊学園の近くにあったおすすめの土地を見学します。

野口は、関東大震災をきっかけにして、翌1924年（大正13年）に西巣鴨から武蔵野村吉祥寺に居をうつしてしま

した。越してきて、吉祥寺を気に入ったからこそ紹介したのでしよう。

「金子光晴と武蔵野」には、「ひばりが鳴き、富士山が一望のもとに見渡せる野趣豊かな土地で、一目ですっかり光

晴を魅了した」と記されています。それまで金子が住んでいた赤城元町（現・新宿区）の周辺と比べる視点もあったことでしょう。

成蹊学園近くのその土地は、三千代の才覚も手伝って破格の値段で購入できたそうです。さらに、東中野の邸宅を破格の値段で譲り受けてその地に収容し、実際に引っ越したのは1938年（昭和13年）のことでした。

金子が気に入った吉祥寺生活の中心には生命力溢れる大地の「野趣」があったのだと思います。そこに都市生活の便利さを提供する文明があったわけではありませんでした。実際、電灯こそ灯っていた

ものの、ガスも水道もなく、炊事は七輪、水道は井戸という生活環境でした。それが当時の武蔵野だったのです。

「外出好きの彼は朝暮となく散策に出掛け詩想をあたためていたようだ」と息子からみた金子の様子も証言されています。金子にとつての武蔵野は、旅人のままでいられる場所だったのではないでしょう

か。
（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オ

ンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

